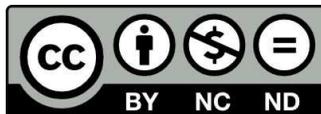


日本IT書紀

152 全国展開

08 宣試篇
卷之二十一 覧國

佃均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

全国展開

一

さて、金岡幸二のことである。

やや鼻にかかった、ときに甲高い声音の持ち主だったが、温厚で人当たりのいい話し方をした。一事を成した人に共通することだが、この人も笑顔がよかった。

最後に会ったのは亡くなった年の一月、東京・大手町の経団連会館かどこかで開かれたインターネット東京本社主宰の新年会だったと記憶している。

バブル経済の破綻が、ソフト／サービス業界に深刻な影響を与えつつあった。金融機関をはじめ鉄鋼、自動車、電機など大手企業が軒並み新規のシステム開発を手控え、進行中のプロジェクトでさえ中断して景気の成行き——どこまで悪くなるか——を見守っているときだった。

懇談会の最初の挨拶で、金岡はそのことに触れ、

——ネットワーク・サービスの分野への影響は軽微ではないか。

という見通しを話した。その理由は次のようなものだった。

まず、景気が悪くなれば、その分、ネットワークの利用は増える。例えば出張費を圧縮する代わりに、情報通信を活用するようになる。物流の伝票処理などは、電子データ交換、すなわちEDIが主流になるであろう。全国規模の基本VANサービスを追求してきた当社の出番である。

しかも情報通信サービスは企業ばかりでなく、社会全体、さらに家庭や個人にまで浸透し、付加価値の高い様々なサービスが次から次に登場する。個人向けに提供されているパソコン通信も、そのうちに音声や画像が追加されるだろう。ここでも当社の技術が生きる。

さらに中長期的な展望でいえば、コスト削減を求める企業ユーザーが情報システムのアウトソーシングに踏み切るようになるであろう。全国にセンターを持ち、基幹ネットワークを独自に構築している当社にとって有利な条件がそろう。また製造業や金融業の大手に独占されてきた優秀な人材が、わが業界にも回ってくる。これも有利な条件として作用する。

聞きながら、

——珍しく強気だ。——
と思つた。

というより、ムキになっているのではないか。

一部上場の情報サービス会社——当時、東証一部上場に情報サービス会社は数えるばかりしかなかった——として、記者の前で弱気な発言をすれば業界全体にマイナスのイメージを与えてしまう、ということを考えてのではないか。

乾杯のあと、懇談になった。ワツと集まった記者たちの輪がほどけ、ふと金岡が一人になったのを見て挨拶に行っ

た。

「ちよつと投資が大きすぎましたね」

すると金岡は顔を寄せ、同じように小声で、

「ちよつと、ね」

と言った。

そのとき、あごに剃り残しが見えた。だから何だ、ということもないのだが、そのことが妙に記憶に残った。

投資、と言ったのは、その前の年（一九九二年）、基幹ネットワークの再構築に総額百億円を投入すると発表したこと

を指していた。加えて、富山市に新本社ビルを建設中だった。売上高が六百億円ほどだったインテックには、やや荷が重い投資ではなかったか。

この人物については、すでにいくつかエピソードを紹介した。

一九二五年（大正十五）に生まれ、終戦のときは満州・

奉天の日本陸軍航空部隊に飛行学生として配属されていたこと、そのとき富士通の山本卓真が同僚だったこと、復員して東大に入り直したこと、四九年に工学部を卒業して東光電気に入社したこと——などである。

まだ書いていなかったことがある。それはこの人物の出自であって、おそらく六〇年代に登場した計算センターの創業者にあつては、学歴とともに出色の存在であつたろう。

業界で広く知られているのは、富山の人であるということだが、そもその姓は金岡ではない。祖父は富山市長、衆院議員、参院議員などを務めた石坂豊一、父親は滑川市の出身で最高裁判所の判事を務めた石坂修一である。

石坂家は長男・誠一が家を継いだ。誠一はのち通商産業省工業技術院院長となった。

幸二は金岡又左衛門の長女・千鶴子を妻に迎えるに当たって、金岡家を継いだ——ということが、「越中人譚」第二十八号「進取」（小沢昭巳、チューリップテレビ）に載っている。

その地で「金岡家」といえば、よほどの力を持っている。江戸の末期、薬種問屋「金岡薬店」を営んでいた金剛寺屋又右衛門（一八二三〜一八七九）の長子・又左衛門（一八六四〜一九二九）が分家し、もって「金岡薬店」の初代とする。

初代又左衛門は一八九九年（明治三十二年）に「富山電燈」（のち北陸電力）、一九一三年（大正二）に「富山軌道株式会社」（のち富山地方鉄道）を興し、県議会議長、衆議院議員となった。

二代目又左衛門は「第一薬品株式会社」「富山合同無尽株式会社」（富山第一銀行）を設立し、貴族院議員。三代目又左衛門は「テイカ製薬株式会社」「富山女子短期大学」「富山育英会」を創設した。

義父の又左衛門（一九〇三〜一九八二）が四代目に当たる。つまり石坂改め金岡幸二は金岡薬店の五代目又左衛門となるべき存在であった。

余談だが、富山市には戦前、およそ三十の薬種問屋があった。いずれもたいそうな構えの屋敷であったそうだが、一九四五年八月の空襲で金岡薬店のみを残して焼亡した。その建屋は一九八一年に県に寄贈され、県民会館分館「金岡邸」となり、九八年、国の登録有形文化財となった。

金岡幸二の出身地は『朝日人物事典』（朝日新聞社）によると「東京都」とあるが、石坂家が富山県出身のため「富山県」とする資料もあって、一定していない。

一九四九年に東光電気に入社した金岡は、川上陸水（のち塩尻市観光協会会長）と懇意になった。川上は金岡の四歳年上で、東大工学部総合研究所に所属しながら、囑託と

して東光電気に入社していた。

当時のことを松本市の雑誌社が発行した雑誌に川上が書き記している。

東光電気では給料の遅配が続いた。不景気の風に対抗するためにいろいろな処置を取ったようだったが、簡単には回復しなかった。しかし、そうは言っても従業員は生活のために闘わねばならず、とうとうストライキに突入。

（中略）

組合運動をしている中で、私は素晴らしい友人にも出会った。その一人が金岡幸二氏。富山県出身で東大の計測工学科を卒業して東光電気に入社、私より四歳くらい若かった。同志として会社側と闘った。会社側の意向で人員整理が始まると、私が一番に名前が上がったが、金岡氏の名前はなかった。しかし、私と同じ時期に会社をやめて郷里に帰った。

川上は東大に戻って金属組成の研究を続け、東北大学助教授の口がかかったとき、長野県塩尻にある妻の実家が破産寸前に追い込まれた。五二年、やむを得ず塩尻に戻り、その家業を継いで「株式会社カワカミ」を起こし、のちには松本調理師専門学校を創設している。カワカミは名物駅

弁「岩魚ずし」の本家であつて、現在も塩尻駅で売られている。

富山に戻った金岡は北陸製塩に入った。大日本精糖、日本鋼管、北陸電力などが、海水から食塩やマグネシアクリンカー、臭素などを抽出しようという壮大な計画のために共同で設立した技術開発会社である。ここで企画部長になった。

二

金岡にやや遅れて、同様に挫折感を抱いて富山市に戻った青年がある。その青年の名は中尾哲雄といった。のちに金岡のあとを受けてインテックの社長、会長となる。

中尾は高校三年生のとき結核に罹つたが、病いを隠して上京し、大学進学を志した。ところが下宿生活の栄養不足がたたつて咯血し、故郷に戻らざるを得なかつた。療養しつつ富山大学経済学部に通い、六〇年に日興証券に入社した。

「ストレプトマイシンという特效薬が効いた」と中尾は言う。

証券会社の仕事を通じて金岡と知り合い、あるいは不二越の井村荒喜と懇意になつた。その井村の紹介で富山商工

会議所に入ったのは六五年春のことだつた。

このとき、商工会議所では

——当地にも計算センターをつくらうではないか。

という話が持ち上がった。

薬種の取扱い品目が多品種にわたり、事業者は中小零細でありながら「富山の置き薬」は全国に広がっていた。この計算業務だけで膨大な人手を必要とし、従来の大福帳による販売管理では大阪の製薬メーカーに圧倒されてしまう。地元の有力企業も出資するところまで話がまとまり、社長を選ぶ段になつて金岡が大きく浮上した。東大出である。かつ、「金岡家」の次期当主ではないか。

だが、北陸製塩の企画部長からいきなり社長というのは性急に過ぎた。そこで地元経済界を代表するかたちで加越能鉄道社長、高岡文化ホテル社長を兼務し、元北陸電力副社長である西泰蔵が社長に推され、金岡が代表権を持つ専務ということになった。

金岡は、実兄が通産省の工業技術院に勤めていたことや、奉天航空隊で同期だった山本卓真が富士通信機製造で電子計算機の開発に従事していたことに刺激を受けていた。さらにいえば、地元経済への貢献を是とする家風があつた。

機種を選定を任された金岡は、国産、外国製の主要な計算機をつぶさに調査し、技術的にUNIVAC機が最も進

んでいるという結論を出した。この時点では正しい選択であった。

一九六四年一月十一日、富山相互銀行、富山地方鉄道を中核に、資本金一千万円で「株式会社富山計算センター」が設立された。本社は富山市入船町三一番地に置き、北日本放送局の旧送信所（鉄筋平屋約百八十万平方メートルと木造平屋約十七万平方メートル）を間借りし、三月十日にUNIVACのPCCSが設置された。

県経済界をあげての新会社であったため、役員には錚々たる顔ぶれが名を連ねたが、従業員は十七人しかいなかった。この中に岩田三郎（のち計算部長、東京事務所長）、松野勲（のち大阪センター所長）などがいた。

営業、打ち合せ、パンチカードの納品、採用などは金岡がすべて一人でやった。商工会の会員としてセンターの設立には参加したものの、自社の計算業務はソロバンで十分という経営者が少なくなかった。

財布の中身を知られるのが嫌だという感覚が強かったため、日本海瓦斯、細川機業、富山地方鉄道など地元企業からの受託計算から始まった。富山市など地方公共団体、北陸電力などに事業が拡大するのはのちの話である。

「最初はカツカツだった。社員の給料を払うと何も残らない。毎日、仕事を探して県内を飛び回った」

難物は雪だった。

富山市内は日本海に近いのでそれほどでもないが、高岡、礪波などは雪が深い。現今のように高速道路はなく、国道といえども消雪施設は完備していない。山越えの道は路面が凍結し、チェーンをつけていても車輪が空回りした。

吹雪にあつて立ち往生したこともあった。

「雪の道と悪戦苦闘しながら、納品したものでした。一度、カチンカチンに凍った雪に足を滑らせてね。持っていたパンチカードが一面に散らばってしまった。

かき集めはしたものの、使い物にならない。

——社員が苦勞して打ち上げたのに……。

と思うと、口惜しくてね、涙が出た。

雪に濡れたカードを見せて頭を下げ、もう一度、全部打ち直したこともあった」

そんなことを、金岡はよく語っていた。

創業期における同社の転機は二つある。

一つは一九六六年一月、日本通運の新潟支店から電子計算機の運用まわりを依頼されたことだった。日本レミントン・ユニバックは日通新潟支社にUNIVAC1004モデルⅡを納めたものの、「システム・サポートは当社の領域ではない」として富山計算センターに再発注したのである。

同社にとって初めての県外営業所の設置となった。

これがきっかけとなって、金岡はプログラム開発と計算処理の受託、さらに運用までを一貫するサービスの可能性に気がついた。

第二の転機は翌六七年である。

三菱電機の富山商品営業所との取り引きが始まった。これは三菱系列で地元の富山交易から売掛管理業務を受託したのがきっかけとなった。営業所の受注・販売管理業務を受託し、そのサービスの品質が好評だった。

きっかけが、新しいきっかけを生む。

折から三菱電機の本社でも商品管理の電算機処理を本社による集中処理に転換する作業が進んでいた。システムの変更とオーバーフローの問題から、富山商品営業所が高く評価している富山計算センターに全面的に委託する話がまとまった。

東京都世田谷区池尻にあった三菱世田谷ビル内に東京事務所が開設されたが、このことは情報処理サービス業ならず計算センター業の世界にとって「事件」以外の何ものでもなかった。天下の三菱電機が、名も知れぬ地方の計算センターに業務を委託する、というのである。

東京事務所の開所式は六八年二月三日午前十一時から、

恵まれた天候の下で関係者約二百人を集めて盛大に行われた。

と同社の広報誌「広報計算センター」二月二十日付号は記している。

続いて同年、名古屋、七〇年に仙台、大阪と全国展開がスタートした。

この間、富山センターの計算機をUNIVAC120からUSSCにレベルアップしたが、PCSからストアッド・プログラム・システムへの転換がうまく行かなかった。日本能率協会に勤めていた下條武男と知り合ったのはこのときである。

「エクスターナル・プログラミングとカードの運用から、インターナル・プログラミングと磁気テープの運用への転換というのは、それこそシステムの概念がまるつきり違う。社員は手探りでバタバタやっているし、計算機はうまく動いてくれない。そこで下條さんにコンサルティングをしてもらった」という。

「スムーズな運用ができるようになるまで、二年か三年かかったのではなかったか」

要員の養成に時間がかかったのである。

一九六七年に下條が独立して「日本コンピュータ・ダイナミクス」というシステム設計とプログラム作成の専門会社を東京・恵比寿に設立したとき、金岡は諸手をあげて賛成し、資本金百万円のうち二十万円を出している。

後年、下條は

「系列化してやろうとか、うまく儲けてやろうというよ
うな、俗っぽい欲がまったくない、純粋な人でした」

と語っている。

このあたり、裕福な家に生まれた者に特有な屈託のなさ
というべきかもしれない。

三

地元経済界に支えられ、さらに三菱電機という強力な顧
客を得た富士計算センターは、順調に事業を拡大していっ
た。

一九七二年度における同社の状況は次のようであった。

【本社所在地】

富山市桜橋通り一―一八（富山本社）

東京都港区芝西久保明舟町二―一（東京本社）

【計算センター】

札幌、仙台、新潟、富山、高岡、東京、名古屋、大阪

【資本金】一億五千万円

【従業員数】五百四十七人

【売上高】十七億円

【業務内容】①受託計算②データ入力③ソフト開発④要員

派遣

【使用機械】

UNIVAC USSC

MELCOM7700

FACOM230―25

MELCOM3100―10T

従業員の数で比較すると、同じ時期、計算センターの最
大手は日立製作所系の日本ビジネスコンサルタント（NB
C）一千四百人だった。これに次ぐのは富士通系の富士通
ファコム（のち富士通エフ・アイ・ピー）一千人、日本証
券金融系の日本電子計算（JIP）九百人であって、それ
に続いて東京・大阪など大都市圏にある計算センターが三
番手グループを形成していた。

すなわち、協栄生命系列の協栄計算センター四百人、伊
藤忠商事系列のセンチュリリサーチセンター四百八十人、
住友銀行系列の日本情報サービス四百二十人、三和銀行系

列の東洋コンピユータサービス四百五十人、独立系の日本計算センター四百人である。という状況の中で従業員五百四十七人というのは全国第四位の規模ということになる。

気がついたとき、いつの間にか富山計算センターは全国で第四位、独立系であり、かつ地方都市に本社を置く企業ではトップに位置していた。

——地方計算センターの希望の星。

としての重責が、金岡の肩にかかってきた。

以後、金岡は独立系計算センターの全国組織「日本計算センター協会」を創設し、七〇年二月に社団法人・日本情報センター協会が発足するに当たってコトの成否を左右する役割を負う。

さらにのち電気通信事業の自由化をめぐっては、早期の自由化に向けて精力的に動き、ついには一九八五年四月の電気通信事業法施行を実現した。それらのこととは別に章を立てて書く。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

インテック東京本社 登記上の本社は富山市だが、仕事の関係や社員数の観点から東京にも本社機構を分割して設置していた。地方に本社を置く情報サービス会社の多くは東京に営業所や支社を置くのが一般的だが、インテックの場合、早くから富山、東京、大阪の三拠点を軸に地域ごとの所管を明確にし、それぞれの実情に応じた事業展開を行っていた。

パソコン通信 インターネットが普及する前段階に、パソコンの個人ユーザーが公衆回線で結んで草の根的に開始し、電子メールや電子掲示板を楽しむグループが形成された。商用サービスが提供されたのは一九八六年からである。日商岩井と富士通が米コンピュサーブ社の技術を導入して開始した「ニフティ・サーブ」、日本電気の「PC-VAN」、アスキーの「アスキーネット」、フジミツクの「EYENET」、朝日新聞社の「ASAHINET」、NTTPCCコミュニケーションズの「NTTPCCネットワーク」などが代表的なサービスだった。インテックも「Trīp」の名でサービスを行っていたが二〇〇五年一月末日をもって終了した。

川上睦水 かわかみ・むつみ/1921〜 高知市に生まれ旧制高知高校から東京帝国大学工学部に進んだ。研究員として東光電気に入入しているうち終戦となりそのまま入社したが五二年妻の実家を継ぎ駅弁製造販売のカワカミ社長となった。社業のかわら五九年塩尻市中央公民館館長、六一年塩尻市体育協会会長、八二年塩尻市観光協会会長を歴任した。著述論文「合金鑄塊分析

への定量分光法の一應用」などがある。  
松本市の雑誌 松本タウン情報社刊行の「タウン情報」第二号による。

不二越 長崎県出身の井村荒喜が福沢桃介の援助を得て一九二八年に創業した「不二越鋼材工業」が前身で、精密工具の国産化を目指した。戦前・戦中は軍需工場に指定され、戦後は農業・工業用機械に向けたベアリングの製造が主な事業となった。のち油圧機械、溶接ロボットなどにも進出している。

大福帳 日本古来の商売管理方法で、年月別、地域別、得意先別などに分類した帳面に売掛け、買掛けなどの情報を記入しておき、入金があれば当該項目を消しこむ。現存する日本最古の商業帳簿は、伊勢の富山家の「足利帳」で、元和元年(一六一五)から寛永十七年(一六四〇)まで二十五年間にわたって富山家の財産を記録している。ちなみに大福帳の根源は十五世紀から十七世紀イタリヤ商人が多用した帳簿であつて、その表紙には「各商人は一目的のために働いていて、この目的を満足させるためにあらゆる努力を尽くしている。だれでも生産手段(資産)のために、商取引を行い、そして自由に追求し、そして利益を競う」「そのために商人はどの帳簿の初めでも、主イエスの御名を記して業務を始めるべきで、常に心の中に尊い神の名を留めるべきである」などの文言が記された。富山家「足利帳」表紙に「伊勢大神宮」五大方菩薩」と書かれているのはその名残りとする説がある。『パチョーリ簿記論』(本田耕一、森山書店)。

加越能鉄道 一八九七年開通の中越鉄道(のちのJR城端線)に接続するため北陸線石動駅から中越鉄道福野駅を経由して青島に至る砺波鉄道が建設された。一九一九年、金沢と福野を結ぶ金福

鉄道を合併し「加越鉄道」と改称、四三年の交通大統合で富山地方鉄道（地鉄）に統合のち五〇年「加越能鉄道」となった。庄川ダム建設の資材運搬で活況を呈したが、過疎化による乗客数の減少で七二年九月を以って全線が廃止された。のち富山県内の路線バスを中心とするバス会社となった。

# 日本IT書紀 152 全国展開

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。